東北アジア戦争としての朝鮮戦争

和田春樹

一　はじめに

只今ご紹介をいただきました和田でございます。朝鮮戦争について今日はお話をさせていただきます。

朝鮮戦争がどういうものであるかということについて考えるについては、何よりも、朝鮮戦争について自分がよく知りたいということでした。それが、私がこの仕事をするきっかけです。実は私は一九三八年に生まれまして、戦争が終わった年に小学校の二年生でした。そして小学校を卒業したのが、一九五〇年の三月です。四月に中学に入ってすぐに、私は足を折って家で寝ていました。その時に朝鮮戦争が起こりました。そして中学校を出ましたのが、一九五三年の三月です。朝鮮戦争が終わったのが一九五三年の七月でして、つまり私の中学生の時代、自分が世の中のことがわかりだし、社会についてものごとを考え始めた時代が、まさに朝鮮戦争の時代であったわけです。

ところが自分にとって、あとでも申し上げますが、これは非常に遠い戦争という感じがしていました。自分が経験した太平洋戦争は、子供でしたが、非常に深刻な戦争でありました。それに対して朝鮮戦争は、それが起っていること自体が非常に遠い感じの戦争でした。成人した後は、ヴェトナム戦争については、非常に大きな意味を持つ戦争だと自分でも思いました。では朝鮮戦争とは何だったのだろうということが、私にとっては謎でした。そのことを知りたいというのが、私が朝鮮戦争を調べて行く根本的な動機です。

二　資料の紹介

さて、最初に資料と研究についてお話ししたいと思います。朝鮮戦争といいますと、資料の公開というものが非常

に複雑に進展してきています。この進展の仕方というものには非常に特徴があります。いまだにその資料の公開は続いています。このプロセスを全体として理解することが、朝鮮戦争認識の非常に重要な部分となります。またそのような資料が明らかになってゆくにつれて、研究も進展してくるわけです。従って資料の公開との関わり合いの中で、研究の展開というものを見ておく必要があるわけです。いま朝鮮戦争に関して本を書いたり論文をまとめるということは、非常にリスキーなことです。書き上がった途端に、新しい資料が発表されるということになりますので、そこに特別な難しさがあるわけです。私は新しい資料が出る度に書き直してきた論文、そのつど発表した論文を、間違いを含んだ論文も含めて年代順に並べて、本にするというスタイルをとりました。これは奇妙なことです。本来ならその時点での資料の全てを掌握して、それに基づいて自分なりに結論を出すべきものでしょう。けれどもそのようにしなかった、否できなかったのは、今申し上げたような、資料発掘の状況というものがあったためです。

よく知られている一般的な資料については、既に久しく前に発表されていたもので説明の必要はありません。重要なのは、アメリカの資料が、いわゆる三〇年原則に基づいて公開されてきたことです。朝鮮戦争が一九五〇年の勃発ですから、一九八〇年からアメリカの政府資料を見ることができるようになったわけです。代表的なものはお手元のレジュメにあげてあります、Foreign Relations of the United States という、国務省の文書を中心とした外交関係の資料です。各年度ごとに編纂されていまして、第7巻は朝鮮を扱っています。すでに朝鮮戦争の全期間の分は完結しました。これを見ると、ソウルからの電報も、東京からの電報もあって、アメリカ政府の内部の動きが日を追ってわかります。このように本となって公刊された資料は、そのもとになっている本体の資料が公開されていますので、この問題を突っ込んでゆく研究者なら、当然のことながら本を見るだけではなく、アメリカのナショナル・アーカイブに行って、国務省のこの時期の本来の文書を見るということになりましょう。もちろんそれは全面公開ではありません。アメリカ政府にとって都合の悪い部分は、未だに Classify（機密指定）されたままです。それでもやはりアメリカは基本的に資料をオープンにしました。これが朝鮮関係資料の最初の公開です。

次にやはりこれもアメリカですが、捕獲北朝鮮文書 Captured North Korean Documents といわれているものです。これらは朝鮮戦争の際に、アメリカ軍が北朝鮮で

押収して持ち帰った文書でして、ナショナル・アーカイブの分館のスートランドにあるナショナル・レコーズ・センターに保管されています。番号はお手元の資料にあげておきました。これは非常に雑多な資料ですが、金日成首相の執務室にまで入って、彼に来た招待状とか、「金首相閣下」とか書かれた彼に献呈された本なども、押収してきています。もちろん大事なものは持って逃げてますから、それ程大したものではありません。政府のトップの資料とかはもちろんありません。しかし大体一九四七年頃から、朝鮮戦争が起こる一九五〇年までの北朝鮮の刊行物、新聞・雑誌については相当に揃っています。北朝鮮のそのような資料を閲覧することは非常に困難ですので、当時の北朝鮮についての基本的な文書で公刊された類のものは、全部ここにあるわけです。この資料の重要な部分は、アメリカの献身的な学者によってコピーされて復刊されて、日本では慶応大学と私の所属する東京大学社会科学研究所に入っています。あと文書の類は地方の共産党の資料が、局部的にですが、ここにあります。それから外務省のいくらかの資料と、内務省の資料が含まれています。それから末端の資料ですが、戦争前夜、開戦直後の軍部隊の資料があります。これは北朝鮮の四五年から五〇年までの歴史に関する、基本的な一等資料です。これらの資料は大体七〇年代の終わりくらいから見れるようになりました。

次は中国の資料です。中国は七八年からいわゆる改革開放体制に入り、八〇年代に入って歴史学のルネッサンスのような状態になりました。もちろん中国共産党のイデオロギーというものがかかってはいますが、それでも歴史家たちは、今まで書くことができなかったことに対して、どんどん資料を発掘して発表してきたわけです。お手元のレジュメにあげておきました『建国以来毛沢東文稿』というのは、『毛沢東全集』には入っていない、電文であるとか、指示文書であるとか、ノートであるとか、そのような基本的文書です。四九年の建国以来のものですから、第二巻が一九五〇年にあたっています。これも非常に重要な資料です。朝鮮戦争についてもいろいろな毛沢東の指示の文書があります。もちろん全部ではありません。これからまだ中国からも出てくるものと思われます。

また朝鮮戦争に関わった将軍たちの回想録が、八〇年代に入ってから次々と刊行されました。レジュメにあげたように彭徳懐は中国人民志願軍の総司令官です。聶栄臻は国防部の部長、楊得志も朝鮮に行った師団の司令官で、後に総副司令官になりました。杜平は政治部の部長、洪学智もやはり精神面の立場の人です。それから最後の師哲という人は毛沢東のロシア語の通訳だった人です。中国とソ連の

会談に関しては彼が通訳をしました。こういう人々が回想録を書いております。この中では彭徳懐の回想と師哲の回想録が日本語に訳されています。非常に重要な資料です。

次に挙げました資料を説明します。もと北朝鮮軍や北朝鮮で働いていた人が、亡命したり脱走したり、あるいは祖国建設のためにソ連から北朝鮮に赴いていた人が帰国したり、つまり事実上の追放ですが、そうした人たちが語り始めるようになったわけです。最初の人朱栄福（チュ・ヨンボク）は朝鮮戦争の時に北朝鮮軍から逃げた人で、その後チリに行った人です。その人の本が最初に出ましたが、信憑性についてはいろいろと疑問がありました。新しい動きとしては八八年の崔泰煥（チェ・テファン）の資料があります。この人は朝鮮戦争の時に捕虜になって、韓国で釈放され、今も韓国に住んでいる人です。この人を韓国の若手の歴史家たちがインタビューしまして、彼らが出している雑誌に載せました。これも非常に重要な資料です。それからレジュメに挙げてある李相朝（イ・サンチョ、ミンスク在住）、鄭尚進（チョン・サンジン、アルマアタ）、姜尚昊（カン・サンホ、レニングラード）、朱紅星（チュ・ホンソン；延吉）という人たちは、北朝鮮側で朝鮮戦争においても重要な役割を果たした人たちであります。彼らは結局北朝鮮にはおれなくなって、それぞれの居住地に去った人たちです。特に李相朝（イ・サンチョ）は、休戦会談の北朝鮮側の代表団の一人でした。ソ連が北朝鮮に「個人崇拝」批判の圧力をかけた一九五六年に、彼はモスクワにいた北朝鮮の駐ソ大使で、そのまま亡命しました。それから鄭尚進（チョン・サンジン）は文化省の次官だった人です。レジュメには挙げてませんが彼と一緒に朴一（パク・イル）という人がいまして、金日成大学の副学長でした。今は鄭尚進と同じアルマアタに住んでいます。彼らは今、金日成体制打倒の運動をしていまして、一月か半月くらい前にそれに関する大会があって来日しました。私はその時にホテルで会いました。姜尚昊（カン・サンホ）という人は地方党副委員長で、戦後に内務省の次官となりました。朱紅星（チュ・ホンソン）は延安からきて、第六師団という朝鮮戦争で活躍した師団の幹部でした。中国東北の延吉にある延辺大学の朝鮮問題研究所の所長をしていました。もうなくなられました。日本には筑波大学の交換教授で来られたことがあります。この人たちには私は九〇年から九一年にかけて、お目にかかってインタビューしました。

それから兪成哲（ユ・ソンチョル）という人がいまして、彼は朝鮮戦争の時の作戦局長という、非常に重要なポストにいた人です。この人は韓国でも話しましたし、ソ連でも新聞に語ったものが出ています。この人はもうなくなりま

した。この証言ももちろん貴重です。それから北朝鮮から中国に逃れた人で、呂政（ノ・ジョン）というペンネームで書いている、本名姜秀鳳（カン・スボン）という人がおります。牡丹江に住んでいる人です。この人が自分で書いたメモワールを韓国で出版していますが、これは日本でも翻訳されており、重要なものです。

このようなわけで、いままでは語りたいと思っても、ソ連や中国の政府が抑えていたために語れなかった人たち、それから韓国の牢獄から出てきた人たちも、八〇年代の末から九〇年代にかけて事情を語り始めたということです。

次はソ連政府の資料を説明いたします。八九年からソ連が大きく変わってきます。ペレストロイカからソ連邦の終焉・ソ連共産党の解散というところまできまして、まずソ連共産党の文書が公開されました。さらに外務省、軍の資料も、次第に明らかになってきつつあります。

レジュメにあがっているようなかたちで、いろいろな人が資料を出しています。特にヴォルコゴーノフについて最初に申しあげておきます。彼はソ連の軍人でした。もと軍事史研究所の所長だった人で、そこを解任されましたが、議員となり、エリツィンの顧問をしています。この人が資料公開を検討する委員会の委員長です。そのような委員長が少しづつ資料を外に発表してます。恥ずかしい話ですが、売っているのではないかとさえ思われます。そしてこの人は隠されている資料を使って、まずはスターリン伝を書いて、次にトロツキー伝を書き、今度はレーニン伝を出しました。皆翻訳が出ています。ロシアの歴史家はみな彼のことを怒っています。資料の公表を左右する立場にありながら、自分が隠されている資料を使って本を書くわけです。それで良い本を書くのならばまだしも、くだらんものを書いているといって、みんな怒っているのです。しかし私は彼にずいぶん助けられて本を書きました。なんとか彼の資料が正確に発表されたものであることを願っておりました。ですが、残念ながら彼の資料の引用は不正確でした。この人はやはり、非常に問題があります。ことにレーニン伝は問題がありますので、まあ一度ご覧になってください。このヴォルコゴーノフが『スターリン伝』の韓国語訳に、韓国の人が喜ぶだろうということで新しく朝鮮戦争の章を書き足しました。その際にその資料の関連部分を朝日新聞社に売ったのです。それを朝日新聞が掲載し、私が解説を書きました。私は彼の資料の中で一番大切なところを引用したのですが、それがとても不正確なものでした。私も大いに反省しております。

次に金徹凡（キム・チョルボン）という人がおられます。韓国の防衛関係の大学の先生です。この方もソ連から新し

い資料を入手されて発表しました。これもかなり重要なものです。レジュメのその下の「ソ連外務省調書」（『クーラントイ』（モスクワ）、一九九三年八月六日）も重要です。

ソ連から出るこのような資料について、フロリダ大学のKathryn Weathersby という人が、盛んにその資料の紹介をしています。彼女はロシア史の専門家でして、朝鮮語はできません。従って朝鮮史の知識は低くなります。ですがアメリカ人のロシア史専門家として、ロシアの文書館にまで入り込んでいます。私がどうしても入ることができなかった所にも入って、資料を発掘しています。彼女は大いに頑張って発掘した資料を発表しています。

以上のようなことが単発的に起っていたような状況の中で大きな事件が起こりました。エリツィンが韓国との関係を改善しようとして、韓国の人たちが喜ぶだろうというわけで、朝鮮戦争関係のファイルを、一九九四年の六月に金泳三大統領に引き渡しました。全部で二一六点の資料です。これを金日成が死んだ後、七月二〇日の葬儀の日に韓国外務省が発表しました。まあ相当意地悪なやり方だったわけです。意地悪であろうとなかろうと、公開してくれれば歴史家としては有難いわけです。ですが残念ながらそれは、資料の目録と要旨だけです。全文の資料を発表したものは、僅かに四点にすぎず、非常に残念です。今日に至るまで、全文の発表はありません。実はエリツィン文書・エリツィン・ファイルというものは、ハンガリー事件に関するファイルがハンガリーにも渡されております。ソ連がハンガリー事件にどのようにかかわったかを示す資料のファイルを、ハンガリー政府に渡しました。ハンガリー政府はこれを文書館に公開展示し、それをハンガリー語に翻訳して出版しました。そして歴史家は、ハンガリーの文書館からロシア語のオリジナルのコピーを取り寄せることができます。そのように完全に世界の人に開かれたかたちで処理されております。けれども韓国の場合は、ロシア側に問題があるのか、韓国側に問題があるのか明らかではありませんが、今日に至るまで要旨しか発表されておりません。非常に残念です。しかし重要な資料です。要約の仕方については、一応信頼してよいと私は考えています。

そうこうしていると本年の五月からですが、ソウル新聞という韓国の政府系の新聞が、九五〇点の資料を入手したと発表しました。エリツィン・ファイルは二五〇点ですから、桁が違うような資料です。ある部分は重なっていますが、ほとんどがまったく新しい資料です。特に、エリツィン文書には戦争が始まるまでが多かったのですが、これは後半部分の始まった後と休戦会談のプロセスについての資料なども発表されましたので、だいぶわかってきました。

いずれどのような形で全文が発表されるかわかりません。新聞の報道があったことだけをご紹介します。

それからそのソウル新聞に負けじと、日本の産経新聞が九五年八月二一日に（新たな資料の入手を）発表しました。産経新聞が発表した資料は実に驚くような資料です。朝鮮戦争は六月二五日に勃発したわけですが、六月二五日に戦争が始まったらどうなったのかという点は、一番知りたいところであります。エリツィン・ファイルには、ソ連の大使が平壌から次々に送っている報告が多く入っているわけです。しかし、戦争が始まったらどうなったかという報告は、まったく含まれておりません。ところが、この産経新聞の資料の中には六月二六日の資料があるのです。二五日に攻めて戦争を始めたらどうなったかということをスターリンに宛てて、厳密にいうとスターリンではなくて、参謀本部の次長に宛てて駐平壌のソ連大使が送っています。それが発表されたわけです。ある意味で一番重要で決定的な資料が産経新聞に載っている。『正論』の一一月号と一二月号に、一六点の全訳が載っています。

このような状態は、ある意味で奇妙です。韓国政府あてに「貴方たちは欲しいだろうから、調べたらこの様な資料があった」といって渡したものの中には、このような決定的な資料がなくて、あとで日本の新聞社にそれを売っているいうわけです。あるいはそれらは、エリツィンが渡した時は発見できていなかったのかもしれません。しかし、ここにおおいに問題があります。今ソ連の資料は、共産党の資料が一番オープンになっています。しかし共産党の資料で最も重要な部分・極秘の部分は、全てクレムリンの文書館、クレムリン・アーカイブというところに収めれていたわけです。昔は書記長のアーカイブでしたけれども、今は大統領のアーカイブになっています。ソ連共産党文書の重要な部分、つまりソ連国家の最高機密に属する資料は、ロシア大統領のアーカイブに全て収められているわけです。ハンガリーに渡したハンガリー事件の資料も、朝鮮戦争の資料も、そこから出てきたと私は想定しています。このアーカイブから、次第に資料を外部に公開するようになってきているということにはなっています。しかし、その公開が恣意的に操作されていることが、一つの大きな問題です。そして外務省の資料というものも、あまり自由にというわけにはいかないのです。一番不十分なのは、軍の資料です。ソウル新聞と産経新聞には、断言はできませんが、軍の資料が一部分出たのではないかと思われます。基本的に軍の資料は、非公開のものですから、まだまったく公開されていません。

ソ連の資料はこれからもっと開いてくるでしょう。ある

史苑（第五六巻二号）

意味では非常に恣意的に処理されていますから、今後はもっと公開していくであろうと思われます。

ソ連共産党の資料の中で一つ重要なものとしては、中央委員会の国際部の日本共産党関係の資料があります。戦前の資料はコミンテルンの資料がありますが、これは戦後のコミンテルンが廃止になった後の、国際部の共産党関係の資料です。この時期の日本共産党の研究にとっても重要です。日本共産党は資料を公開しませんから。日本共産党では、不破書記長の名前で出た、野坂参三問題とソ連の内政干渉問題に関する告発の二巻本（不破哲三『日本共産党に対する干渉と内通の記録』上下、新日本出版社、一九九三）があります。非常に充実した研究です。しかしそれは、全てソ連共産党の資料を使いながら、ソ連共産党の犯罪を暴くというかたちのものです。自分のところの資料はほとんど発表しておりません。

もうひとつの文書が、ＧＨＱの文書です。ＧＨＱの文書は、今ではほぼ全面的に公開されています。ＧＨＱの文書は、国会図書館のほうで悉皆的に撮影しており、それをマイクロ・フィッシュにして頒布していますから、方々で見ることができます。その中に日本共産党と在日朝鮮人連盟の資料があって、これも非常に重要な資料です。

朝鮮戦争について研究しようとするならば、まずこれだけの資料というものを研究しなければならないということです。従って朝鮮戦争研究というものは、今一番興味深いテーマであり、しかしまたとても難しいテーマでもあります。つまり英語・中国語・朝鮮語に加えて日本語・ロシア語というものを、すべて使えなければ研究はできないということです。このように非常に国際化された研究テーマになっているということが大きな特徴です。

三　研究の紹介

資料の紹介が長くなりました。続けてこれまでの研究を簡単に紹介して行きたいと思います。

まず最初に挙げなければならないのが、ストーン(Stone,I.F.)の『秘史朝鮮戦争』です。これは朝鮮戦争の最中に出ました。ストーンはアメリカのジャーナリストです。当時アメリカの中では、「この戦争は北朝鮮が攻めてきた」つまり北朝鮮の侵略であると受け止められていました。ストーンは、北朝鮮が先に攻めたのは恐らくそうであろうと認めた上で、これはアメリカの方から罠を仕掛けたのではないかという説を唱えました。あるいはアメリカは知っていてやらせたのではないかということを、当時のアメリカの政府資料とか新聞とかの、ごくごく僅かな資料をもとにして自説を発表したのです。もちろんそれは、当

時の左翼から見ると非常によい考えだというわけで、もてはやされることになりました。左翼の方は、朝鮮戦争とはアメリカの侵略である、アメリカと韓国の陰謀ではあるが基本的にはアメリカの陰謀である。アメリカが戦争を仕掛けたのだが、百歩譲ってもアメリカが罠を仕掛けて北朝鮮にやらせたのだ、このような考え方が主流でした。北朝鮮が最初に戦争を仕掛けたとは、あまり認めたくなかったのです。

それから六〇年になりますと、ホワイティング(Whiting, Allen S.)というアメリカの学者でハワイにいた人が、中国が参戦する過程についての研究を発表しました。これは、中国は戦争を望んでおらず、中国はやむを得ずこの戦争に加わったのであるという考え方です。戦争は北朝鮮がやったとすると、それは即スターリンと毛沢東が北朝鮮にやらせたのであるということになったわけですが、そうではなく中国とソ連の間には緊張があって、協同で陰謀をめぐらしたとは考えられず、中国人民志願軍はむしろやむを得ず参戦したのだと、ホワイティングは考えました。

日本では信夫清三郎氏が、六五年に議論を出して、これも大きな問題となりました(信夫清三郎「現代史の画期としての朝鮮戦争」『世界』一九六五年八月号)。信夫氏の考え方は、朝鮮戦争とは内戦であるというものです。内戦であって革命戦争であるというものです。北朝鮮は革命を起こそうと思って戦争を起こし、それに対して韓国が応戦したのであると見るべきだというものです。アメリカが罠を仕掛けたということもあたらない、という考え方を信夫氏は出されました。このためにこの戦争をアメリカの侵略だと考える左翼の人たちとの間に、非常に激しい論争が起こったのです。これが日本の研究状況でした。

以上は新しい資料が出てくる前の話です。色々な見方がありましたけれども、資料がありませんから、なかなか決着がつかなかったのです。

一九八一年にブルース・カミングス(Bruce Cumings)が『朝鮮戦争の起源』(The Origins of the Korean War, Vol.I, 一九八一)という本を出しました。彼はアメリカの左翼的な歴史家で、もとワシントン大学の教授で、今はシカゴ大学の教授です。私は非常に親しくしていますし、尊敬もしています。彼は平和部隊で韓国に行きまして、朝鮮語が非常に上手な人です。彼はヴェトナム反戦派ですから、ヴェトナム戦争をやったアメリカの犯罪の出発点は朝鮮戦争にあると考えるわけです。ヴェトナム戦争でアメリカがやったことも、朝鮮戦争でアメリカがやったことも、基本的には同じことであるというのです。それはアジアの革命的ナショナリズムに対して対抗したのである、という考え

方です。この第一巻は八一年に書かれていることからもわかりますように、先ほどのアメリカ政府の資料や捕獲北朝鮮文書といった、新しく公開されてきた資料を使っています。特に彼は、韓国における米占領軍の資料を非常に細かく使って、戦後の韓国の歴史に対して画期的な叙述を与えたので、韓国の人々に大きな衝撃を与えました。この本は韓国語で二種類か三種類、別々の所から出版されているくらいで、韓国の若手の歴史家に対しても大きな影響を与えました。彼は基本的に、日本帝国主義から朝鮮が解放された後に、新しい国をどのようにつくるかをめぐって戦いがあったのだと、即ち内戦があったのだと見ます。そこで共産主義者を中心とした革命的なナショナリズムに対して、むしろ親日派、つまり日本帝国主義に協力したような人たちが、アメリカと一緒になって対抗するという内戦がずっと続いていたとみます。そのプロセスで朝鮮戦争が起ったのだ、という考え方を出しました。

アメリカ批判という点では非常に徹底した本ですが、そこが問題となります。アメリカが悪いのだということを徹底してゆくと、全てがアメリカのしたことになってしまうのです。では朝鮮人の問題はどこへいってしまうのかといいますと、その問題は消えてゆく傾向にあります。色々な問題が起ってくるときに、朝鮮の内部の事態、民族内部における対立といったことが消えていってしまうのです。それからアメリカが悪いという反面、ソ連の話も消えてゆく傾向にあります。ソ連の問題というものは、明らかに存在します。彼は中国語を読めますから、中国の資料は引用するわけです。しかし重要なことは、カミングスはロシア語が読めないために、ソ連についての認識が弱かったということです。そして日本の事情については、彼の二巻目が出る前に私は彼に会っていますので、私が充分に説明すべきだったのですが、彼は日本の内部で起っていることについても充分に認識しておりません。彼が強いのは台湾です。台湾と南朝鮮、そしてアメリカの内部については、ほとんど考えられる限りの資料を集めて書いたと言ってよいと思います。

そして結論だけ申し上げておきますと、九〇年に第二巻が出まして、この本で彼がいっていることは、朝鮮戦争を誰が起こしたかという質問をすることは無意味だということです。それをいうことは不可能であるというのです。双方で起こそうとする意図があって、いわば状況によって、成り行きであのような戦争になったという考えです。長くは四五年以降の内戦、短くいえば四九年に始まった違う種類の内戦、そのようにして五〇年になるわけで、五〇年の六月二五日はどのような意味でも戦争の開始ととらえるべ

きではないという結論を出しました。この結論をもって、彼は次々に押し寄せてくる新しいソ連の資料の洪水を前にして、どのように自分を防衛するかという、苦しい立場に立たされています。ある意味で研究者の仕事の宿命でもありまして、新しい資料が出てきたことによって、それまで構築してきた自説が崩れる場合もあるのです。彼の仕事の中には、朝鮮戦争の現実というものをどのように見るかという点で、北朝鮮軍の韓国占領、それから米韓軍の北朝鮮占領といった点については非常に新しく分析しました。そこにも価値があると思いますし、色々な意味で彼の仕事は研究の出発点として大きな意味がある仕事であると思われます。しかし今述べたような窮地に彼は立っているわけです。

それから小此木政夫氏の『朝鮮戦争』は、アメリカの外交文書を中心として、この開戦直後のアメリカの対応のプロセスを研究したものです。これらの文書を見ると、戦争が始まったときのアメリカ政府は、非常にあわてており、とてもアメリカが戦争を準備していたというようなことはいえない、というのが小此木氏の考えです。これは戦争が始まったときのプロセスについては、ひとつのスタンダードな研究と言えましょう。

また方善柱（パン・ソンジュ）というアメリカ在住の韓国人の学者がいます。この方は捕獲北朝鮮文書について非常によく調べている方です（「鹵獲北韓筆写文書解題（一）」『アジア文化』創刊号、一九八六年）。その捕獲北朝鮮文書のリプリントも出されている方です。この八六年の論文の中で方善柱氏は、朝鮮戦争に関する数点の資料を発表しています。それは、前線の部隊に「攻撃せよ」「作戦を開始せよ」という命令が出ますが、その部隊に対する命令書と、命令を受けた部隊がどのように実行したかという報告書を発見してこれを発表しました。私が九〇年に「朝鮮戦争を考える」という論文を書きましたときに、方善柱（パン・ソンジュ）氏のその資料に依拠して書きました。その資料によりますと、戦争が北朝鮮政府の命令によって六月二五日に起ったのであって、何か成り行きによって起ったのではないことがわかります。北朝鮮の攻撃命令によって起ったということが、この資料によって完全に論証されていますので、私はこの資料に依拠して書いたわけです。

朱建栄氏の『毛沢東の朝鮮戦争』（岩波書店、一九九〇年）という本が、九〇年に出ました。朱建栄氏は中国上海の出身ですが、日本に来られて今は学習院の先生をしておられる方です。朱建栄氏は非常に多くの中国人の研究者と従軍経験者にインタビューしています。それから中国から出てくる資料を細かく分析しましたので、この段階での中

国側の情報の集大成としては画期的なものだったと思います。よくできていると思います。朱建栄氏は毛沢東が相当に意欲を持って朝鮮戦争をやろうとしたこと、しかし中国の中にも反対論があったこと、そして結局は中国にとっては朝鮮戦争は災難であったという考え方です。そのような意味では、ホワイティングの方向をある意味では受けているといえるかもしれません。

この朱建栄氏の仕事に対して、私は少し批判をもっています。といいますのは、中国の革命と朝鮮戦争には、連続性があるというのが私の考えです。主観的にも客観的な意味においてもです。そのような観点から少し批判をしましたが、そのことについては後で説明いたします。

朱建栄氏は中国人ですが日本語で本を書きました。不思議なことに、アメリカにいる中国人には、これが日本語で書かれていますから伝わらないのです。次に挙げているセルゲイ・ゴンチャロフ（Sergei N. Goncharov）というロシア人と、ルイス（John W. Lewis）というアメリカ人と、シュエ・リータイ（Xue Litai）という中国人が、『不確かな同盟者―スターリン・毛沢東・朝鮮戦争―』（Uncertain Partners : Stalin, Mao and the Korean War）という本を九三年に書きますけれども、朱建栄氏の研究は全然問題にしておらず、まったく読んでいません。そして比較すると、これは、朱建栄氏より水準の低い研究です。これがスタンフォード大学から堂々と出るという、奇妙な状況になっています。資料は国際化しているのに、研究者の方は国際化していない、研究成果の方も国際化していないために、皆がてんでんばらばらにやっているという状況になるわけです。この本は今アメリカでは一番スタンダードな本ということになっていますが、大した本ではありません。

次に萩原遼氏の『朝鮮戦争―金日成とマッカーサーの陰謀』（一九九四年）という本がありまして、これは私と不幸な論争になっていますからご存じの方もおられるかもしれません。萩原氏は赤旗の記者だった人でして、平壌特派員として仕事をしていました。そこで北朝鮮という国はおかしいと、強く思うようになった人です。その前は金芝河（キム・ジハ）の詩集の翻訳をしています。朝鮮文学についても非常に良い仕事をした人でした。北朝鮮と非常に対立して、彼は平壌空港での金賢姫（キム・ヒョンヒ）の写真を発表しました。彼は、金日成体制というものは否定しなければならないと考えて、朝鮮戦争は基本的に金日成の犯罪だということを立証しようと考えられたようです。そして赤旗の記者をやめてアメリカに二年ぐらい滞在し、捕獲北朝鮮文書を細かく分析して、この本を書いたわけで

す。この本の中で、朝鮮戦争の前夜に北朝鮮の部隊は皆前線に配置されていて、命令が出たところで攻撃したということから、北朝鮮が始めた戦争であると述べています。もうひとつは、北朝鮮がそのように準備していることをアメリカはよく知っていて、マッカーサーはそれをやらせて、それを自分の目的のために利用したのだと述べています。ですからこの戦争は、金日成とマッカーサーの陰謀ということになります。金日成の小さな陰謀に対して、マッカーサーの大きな陰謀が加わったのだという考え方です。これは伝統的左翼の考え方で、ストーンの考え方を半分受け継いでいます。

北朝鮮が先に命令によって攻めたということは、方善柱（パン・ソンジュ）氏の資料と研究によってもわかっているのですが、萩原氏も命令が出て命令がどのように実行されたかという点については、全て方善柱氏の資料をくりかえしています。それ以外にもたくさん資料は使われています。だがしかし肝心の最初に命令が出たところに関する資料については、萩原氏も必死になって探されたのですが、方善柱氏が発見された資料以上のものは見つけられなかったようです。私の見るところ萩原氏の本で最も貴重だと思ったのは、北朝鮮軍の部隊の隠し番号を解読したことです。北朝鮮の部隊には全て隠し番号がふってあって、資料には必ずその隠し番号で記されているのです。第六一五軍のようにあっても、実際はそれが第5師団のことであったりするわけです。その隠し番号を萩原氏は解読したために、資料の説明が非常にスムーズになりました。これは萩原氏の功績です。それから今度は北朝鮮が負けて逃げてゆくプロセスでどのように悲惨な状態であったかを、これまで誰も見いだしていない新しい資料を発掘して説明したということも、これも萩原氏の功績だと思います。

その次に私の本が出るわけです。私が、九〇年と九三年の論文に少し書き足して本を出す直前に、ほとんど出来上がったところで萩原氏の本が出ました。そこで私の本の最後に萩原氏の仕事に対するコメントを書きまして、肝心なところは方善柱（パン・ソンジュ）氏の資料であると、だったら自分が依拠している資料は方善柱氏が発表した資料である、それは非常に重要であるというように説明できないのか、そのようにするのが研究者としてのモラルではないか、という事を書きました（和田 春樹『朝鮮戦争』一九九五年、pp. 350-4）。すると萩原氏は非常に怒ったわけです。けれども私は、今でもその考えに変わりはありません。資料を発掘するさい、第一発見者の仕事のプライオリティというものは尊重し評価すべきであり、学者が論文を書くときには、先行研究に対する敬意は払うべきだと思います。

市井の研究者であれ大学の研究者であれ、それは関係ありません。大学院生であれ教授であれ同じ事です。資料にあたって研究する人は全て研究者です。研究者には守るべきモラルがあるということです。先程の問題で申しますと、不破書記長がソ連共産党から入手した資料を使って、ソ連がこんなに悪辣なことをやったという本を書いていますが（不破哲三『日本共産党に対する干渉と内通の記録』上下、新日本出版社、一九九三）、資料の番号は一切あげてありません。ですから誰もそれを追認できないようになっているのです。資料の番号を示すということは、ほかの人に追認して欲しい、自分の読みとりが正しいかどうか検証して欲しいということを示すということです。我々が注の付く論文を書くのは、みなそのような意味があるわけで、それはやはり守られるべきです。本になっているのならともかく、未公開の資料ですから当然そのようにすべきだというのが私の考えです。萩原氏は、そのような見解は自分に対する誹謗だと考えて、激怒されました。

このことについて若干申しておきますと、萩原氏が『諸君』という雑誌の一九九五年の四月号に、「東大教授かデマゴーグか」というタイトルで大きな記事を書きまして、私を批判しました。要するに和田は自分の一番よい発見のところを無視して、どうでもいいところを誉めていると、これがデマゴーグのやり方であるというのです。それからもう一つは、和田は北朝鮮の手先だということです。北朝鮮にいって何かご馳走になったらしいから北朝鮮の手先である。北朝鮮の萩原氏に対する憎しみが、和田の本に媒介されて表れているのだというのです。私は巫女みたいになってしまっているわけです。私の翻訳のミスに対することも指摘もありまして、これは萩原氏の朝鮮語の力は非情に高いですから、私は受け入れるところもあります。ですが萩原氏は、先程の資料についてメンションしないという点については、私の批判は全く受けつけないわけです。また私が自分の本で何を主張しようとしているかという点についても、一切ふれていません。自分に対する批判のところだけを問題にして、和田は北朝鮮の手先だと決めつけているわけです。私も、白昼歩いていたら頭を殴られたような感じを受けていますが、いずれこのことはきちんとお答えしようと思っています。

それから次の研究ですが、アメリカにいる中国人の歴史家でチェン・ジェンという人の“China's Road to the Korean War（Chen Jian, 一九九四）があります。彼は『チャイニーズ・ヒストリアン』という雑誌を編集している編集長で、ニューヨーク州立大学の助教授です。若い人だと思います。この人が書いた本ですが、この本ではむし

ろ中国の朝鮮戦争参戦というものを、中国側にとって非常に積極的な意味を持っていたものとして説明しています。中国のいわば革命的・ナショナリスト的イデオロギーからして、中国にとってこの戦争は必要だったし、意味があったのだという評価です。これは私の考え方に近い考え方です。ただこの人は、朱建栄氏の本は翻訳してもらって読んだと書いてありますが、大して読んでいません。

最後に挙げなければならないのが、韓国の大学講師の朴明林（パク・ミョンニム）氏の『韓国戦争の勃発と起源』という、高麗大学に提出された博士論文です一九九五年八月高麗大学提出博士論文）。今年の八月に出たものです。目下のところはこの研究が資料的には最も広く網羅している包括的な研究です。この本はタイトルを見ていただければわかりますように、ブルース・カミングスの『朝鮮戦争の起源』に対する批判です。ブルース・カミングス批判というものを、真っ向から考えている本です。彼の考えは、朝鮮戦争というものは、一九四八年の体制から出てきたものであって、南と北の双方に武力統一の考えがあったけれども、南はそれを実行しなかったが北はそれを実行したというものです。北が実行したことについては、一種のイデオロギー的な問題が北にはあったのだという考え方です。そして北はそれをはっきりした準備に基づいて実行したと、このようなことを述べている研究です。これが今一番新しい研究です。

朴氏の問題点は、萩原氏とちょっと似た問題です。方善柱（パン・ソンジュ）氏の資料については一切無視しています。大学院生の博士論文であるから仕方がないという意見もありますが、私は彼に対してそれはまずいといいました。方善柱氏の論文は文献目録にも挙げていないのですが、本にするときには直すと思います。

時間をとりすぎましたが、以上が研究の紹介です。あとは手早くお話してゆきたいと思います。

四　東北アジア戦争としての朝鮮戦争

今日は「東北アジア戦争としての朝鮮戦争」というタイトルで、少し問題を広げて考えてみたいと思います。

朝鮮戦争というものは、やはり朝鮮だけの戦争ではなくて、非常に巨大な国際的な事件であったということです。もちろんこれは、準世界戦争として国連安保理事会が非難した、イギリス・フランスをはじめとして非常にたくさんの国が参加した戦争です。しかし私はやはりこれを、東北アジア地域の戦争、東北アジア地域を全面的に巻き込んだ戦争であったと考えて、東北アジアとしては今後この戦争の傷跡から回復し、そして和解していかなければならない

と考えています。このような意味で、私は「東北アジア戦争」と申しました。つまり東北アジアというのはこの場合、アメリカ、ロシア、中国、南北朝鮮、台湾、日本、これらを含みます。この全部が戦争に巻き込まれて、複雑な関係を持ちました。そしてそれぞれの地域のその後の運命にとって、この戦争は大きな意味を持ったと考えることができます。ロシアがこの戦争からどのような影響を受けたかということは、一つの大きな問題点であります。ロシア史家として私は十分にまだ明確になっていないのですが、そのほかの国々にとっては、この戦争の影響は決定的だったと思います。アメリカにとっても日本にとっても、台湾にとってもこの戦争は決定的な意味を持ちました。この戦争は、そのようなインターナショナルなコンテキストで、日本も台湾もそこに入れて研究する必要があります。

次に朝鮮半島の状況はどうであったか、ということがあります。朝鮮半島は日本からの解放後に分断され、分割占領されました。いろいろ議論がありますけれど、米ソによる分割占領というものは、朝鮮半島のその後の運命にとって決定的な意味を持ったと思います。もし米ソが非常に仲良くできるものであれば別ですけれど、直ちに冷戦状態に入っていきますので、米ソによる分割占領は決定的でした。そこで朝鮮の分断に日本は責任がないと言った村山総理大臣に対する私の批判（朝日新聞論壇・一九九五年二月三日）になるのですが、日本がポツダム宣言を受諾した時点が、ソ連参戦の直後であるということによって、南北朝鮮の分割占領ということが起こったのでして、日本の責任がはっきりとあると思っています。もし日本が沖縄戦の直後に降伏していれば、ソ連は参戦せずに朝鮮はアメリカが単独占領していた可能性があります。もし日本が、原爆投下後もソ連参戦後もさらに戦い続けていれば、朝鮮は全部ソ連軍が占領した可能性があります。ですから米ソの分割占領になったということについては、日本が戦争をやめた時点が決定的な意味を持ったと考えれば、日本にも基本的な責任があります。もちろん米ソの責任が大きいことはいうまでもありません。

この米ソ分割占領の枠の中で、朝鮮が南北統一していくためには、非常にわずかな可能性しかありませんでした。一九四五年にモスクワ三相会談で、米ソが後見となって南北の臨時政府を作ってゆくという方針がとられました。米ソが後見になるというところが米ソの信託統治だということで、多くの朝鮮人は反対しました。しかしあの分割占領状況で朝鮮が統一できるとしたら、ほんとに針の穴をラクダが通るような苦労をしなければならなかったのです。朝鮮民族にはその力がなかったということになります。私は

そのように見ています。結局、残っているわずかな糸のように細い可能性をも、生かすことができませんでした。北朝鮮には一九四六年の始めから独立政権ができます。南では内戦状態で混乱してゆくという状態になりました。それで四八年に、南北二つの国家ができます。まず大韓民国ができまして、それから朝鮮民主主義人民共和国ができますが、ふたつの国家は南北に国家ができたのではなくて、それぞれピョンヤン(平壌)とソウルを本拠地としていますが、朝鮮半島全土が自分の版図であると宣言している政権です。ソウル政権、ピョンヤン政権というわけです。中国だと、南京政権、北京政権という言い方に近いとおもいます。ソウル政権は朝鮮全土が自分の版図だと考えているし、一方ピョンヤン政権は、ピョンヤンは仮の首都にすぎず、敵を追い出したらソウルを首都にするのだと憲法に書き込んでいます。このようにそれぞれ相手を全否定するという形で二つの国家ができました。ですから、まさに朝鮮戦争の起源はそこにあるといえます。四八年に相互に全面否定する二つの国家ができたということが、軍事統一という思考を生む根源であったといえます。

これを内戦状態だとカミングスのように言うことはできますが、内戦状態だといっても、事実上の版図が決まっていて、二つの国家が対立するという状態の中でおこる戦争ですから、特殊な内戦であると考えなければなりません。それぞれの国家はそれぞれ国際的に認知され、同盟関係も結んでいるという国家です。そのような二つの国家が四八年に成立して、そして朝鮮の武力統一という思考方式の根源ができました。北朝鮮側ではこの「武力統一」をどのように表現しているかといいますと、「国土完整」といっています。南のほうにいる傀儡を追い出して、そして我々の国土を完成整頓しなければならない。我々の首都はソウルである。ソウルに入って、我々がそこを首都にしようという考えです。大韓民国の李承晩(イ・スンマン)大統領のほうはといいますと、「北伐統一」といっています。南京にできていた国民党政権が、北のほうにある軍閥をなぎ倒して中国を統一するのだ、というかつての中国の北伐の例を見て、李承晩大統領は同じ事をやろうというわけです。南から攻めあがって、北にいる傀儡というか軍閥にも劣らないこのいいかげんな連中をやっつけて、―彼は金日成のことを山賊だと思っていたかもしれませんね―統一したいという考えです。ですから北伐統一、北進統一ということを言いました。

アメリカとソ連がそれぞれ背後についておりましたが、一九四九年にはアメリカもソ連も絶対にこんなことを認めませんでした。ソ連共産党の新しく発表された資料により

ますと、ソ連共産党の政治局の決定で、四九年の九月では、そのようなことをしたらアメリカが出て来るから絶対にだめだといって、金日成に許可を与えませんでした。金日成が私達はやりたいと明確にいったのは、四九年の七月の段階でした。ですがソ連は絶対にこれを認めませんでした。一方李承晩が北伐統一というようなことをいいますと、彼はおかしいのではないか、このようなことを絶対に許してはいけない、とアメリカ政府は考えていました。

ところがです、変化が起こってきます。変化とは、中国における国共内戦の進展です。

日本の中国侵略戦争が終わった後、ただちに国共内戦がはじまります。これはソ連の占領した満洲を中共が拠点としてはじまります。満洲の朝鮮族が重要な戦士を提供し、北朝鮮は一種の「ホーチミン・ルート」となります。満洲からはじまり内戦は華北へ広がります。こうして今度は違った形で満洲の戦争から中国の戦争が起こってきたわけです。それが四九年の一〇月に、毛沢東が天安門の上で中華人民共和国の成立を宣言することによって、大きな峠を越えるわけです。その前には、揚子江突破が大きな転機でしたが、ソ連はこれに対して非常に消極的でした。揚子江を中国軍が突破したらアメリカが必ず干渉するので、止めたほうがいいというのが、ソ連側の意向だったといいます。中国側はアメリカが来るかもしれないということで、百万の大軍で突破してゆきます。「鶏を裂くのに牛刀を以ってなす」と言われるかもしれないが、これが我々のやり方であって、アメリカに対して備えているのだ、アメリカに自分達の力を見せつけて、アメリカが入ってこれないようにするのだということで百万の大軍で揚子江を突破しました。すると南京の政権は、たちまち崩壊するということになりました。

この事態が北朝鮮に非常に大きなインパクトを与えたと思います。南方では戦争はまだ続いており、台湾がまだ残っていたわけですが、しかし四九年の一〇月、中国の戦争は中国共産党の勝利という決定的な局面を迎えていました。これが東北アジア全体に、非常に鋭い緊張を作り出すことになりました。

まず真っ先にその緊張を認めたのがアメリカでして、アメリカ側の対策は日本を固めるという形になりました。日本を固めるということになって、それまでは日本の民主化のための協力者だった日本共産党の位置づけが変わります。すでに一九四七年の二・一ストの後は、日本共産党に対しても冷たかったのですが、それでも共産党が在野でいろいろ発言するということは、GHQにとって日本を民主化していくためにプラスだったのです。少なくとも戦犯裁判が終わるまではプラスだったといえます。それが四九年にな

ると、もうはっきり邪魔なのです。日本の経済を固めてゆくためには、左翼的労働組合をつぶさなければならないし、その背後にいる日本共産党をつぶさなければならない。そして日本の共産党の中で最も積極的かつ戦闘的だった、在日朝鮮人組織、在日朝鮮人連盟を潰さなければならない。アメリカ軍はこのような考え方で、労働組合潰しをやりました。いわゆる首切りです。国鉄労働組合が当面の目標でした。それから在日朝鮮人連盟を解散させました。これは共産党に非常に大きな衝撃を与えました。国鉄労働組合の当時の副委員長鈴木市蔵氏は、今私と同じ町内に住んでいるのですが、その方と話しをしますと、彼は共産党本部にいってゼネストで抵抗をしたいと申し入れたのですが、幹部の伊藤律氏は、それはできないと答えます。その様なことをすると、日本は南朝鮮のようになってしまうと言って、伊藤氏は反対したといわれています。とにかく共産党としてはどうしようもないのです。自分達の一番戦闘的な部隊である朝鮮人連盟が解散させられるという事態になっても、有効な反撃手段は何一つとれずに茫然としているわけです。アメリカ軍はそのようにして左の勢力を抑えこんでゆきました。

そこで開かれるのが、四九年の末の中ソ首脳会議、毛沢東・スターリンの会談です。これは中ソ関係を処理するための会談ですけれども、やはりそこで東北アジア情勢というものも当然俎上にのぼるわけです。中国は当時、中国革命の方式、中国の武装闘争の方針が全アジアにとって有効であると考えていて、それが適用されるべき所としてフィリピン・インドネシアとともに朝鮮と日本を挙げています。ですから自分達が中国革命でとった道は、日本にとっても有効であるという中国人の考え方を、スターリンは支持することになりました。そこで出てくるのがコミンフォルム批判です。日本共産党の平和革命路線は間違っている、日本共産党はアメリカ占領軍ＧＨＱと根本的に対決せよというコミンフォルムの意見が、モスクワから出るわけです。これが五〇年の一月のことです。

これは日本共産党にとっては晴天の霹靂です。日本共産党は徳田球一たちが牢屋から出た日から、一貫して自分達はソ連共産党とは何の関係もないと言ってきているわけです。我々は、まったくの自主独立の存在であって、ソ連共産党とは何の関りもないと言ってきていました。実質的には、ＧＨＱに協力して日本の民主化のために平和的に運動してゆくという方針をもち、自分達が目指すのは、平和革命だと言ってきたのです。ところが突如としてソ連からまるで彼らの支部であるかのように命令が出て、お前達は間違っていると言われるわけです。野坂参三はほとんど犯罪

史苑（第五六巻二号）

人のように批判されました。しかもＧＨＱに対して立ち上がって戦えというようなことを言われたわけです。これで日本共産党はうろたえるわけです。狼狽していろいろと対策を立てて、結局批判を受け入れ、路線を左よりに変えて、占領軍ＧＨＱと対決する路線をとろうということになるわけですが、それがうまくいかないうちに、今度は五月にＧＨＱから共産党幹部の追放の処分をうけることになります。そこであわてて幹部は地下に潜るということになります。こうして日本共産党とＧＨＱが全面対決ということになったわけです。

東北アジアで中国革命が波及した緊張の最初の赤ランプは、日本に灯ったということになります。日本が非常に緊張する状態になった後で朝鮮戦争が起ったわけです。このようなわけで、当時の日本ではアメリカがこのような措置をとったのは、朝鮮戦争の準備のためである、朝鮮戦争を行うためにこのようにしたのだという議論がありました。おそらくそれは正しくないと思います。中国革命に対して日本をどうするかということが、アメリカのモチーフだったのでしょう。

ところで北朝鮮の金日成の方はどうかというと、中国革命が勝利したことに刺激されて、一〇月以降はやはりどうしても自分たちもやりたいと考えるようになりました。中国革命に熱狂しているわけです。当時北朝鮮の軍隊の主力部隊六個師団中の三個師団は、すべて中国の革命に参加した朝鮮人の部隊です。二個師団は途中で鉄砲を置いて帰ってきましたが、最後の一個師団は鉄砲を持って帰ってきまして、軍服だけ代えただけです。つまり中国の師団が北朝鮮の師団になっているのです。前線に配備されていたそのような人たちは早く故郷の満洲へ帰りたいわけです。満州で戦っているときは、自分たちの土地を守るということでした。日本から解放されて自分たちの土地になり、地主も追い出して自分たちの土地にしようという考えだったのでしょう。中国革命が必要だから、中国共産党について海南島の方まで戦ったのです。こんどは北朝鮮へ行けというのは、もちろん中国共産党の命令です。

ここに大きな問題があります、しばしばこのことは朝鮮人部隊の「帰国」と表現されます。朱建栄氏の本にも帰国と書いてあるし、中国側も帰国と説明しています。しかし帰国ではありません。彼らが除隊したら満州、即ち中国東北部に帰るはずです。そこに妻もいるし子供もいるし両親兄妹も住んでいますし、家もあるのです。ですから戦争が終わり、内戦が終わればそこに帰りたいのです。けれどもこの三個師団は北朝鮮へ行って国際主義的な使命を果たしてくれという命令を受けて、北朝鮮に来ていたわけです。

だから早く南を解放し、そして李承晩を追い出して、革命を成就して故郷へ帰りたい、これがこの兵士たちの考えです。当時のスローガンは、「蒋介石と李承晩と芦田均らをやっつけろ」というものでした。北朝鮮のリーダーはどうかといいますと、多くの人が元中国共産党員です。ですから中国での革命というのは、自分たちの勝利と考えています。中国軍のことを「我が軍」と書いているのです。そのような状態ですから、中国が勝利したのだから、次は我々の番だという意識が非常に強かったのです。

金日成は一九五〇年の一月一七日にソ連の大使に向って、今度は我々の番だと、武力統一をやりたいと述べています。そしてモスクワへ行ってスターリンに説明したいと言います。これがヴォルコゴーノフから引用した資料だったのですが、ヴォルコゴーノフがまちがって文章を引用していたので、私はひどい目にあいました。しかしこの大筋は変わりません。金日成がそのように言ったということは正しいわけです。そしてソ連の大使がスターリンに電報を送ると、スターリンは一月三一日に、モスクワへ来てよろしいという許可を与えました。これはもう金日成にとってゴー・サインです。何のために行きたいかを伝えたうえで、会ってくれるというのですから、やらせてもらえるということです。それから後は武器の援助がどんどん進みます。そして最終的な詰めは、五〇年の四月になります。五〇年三月三〇日に金日成は朴憲永（パク・ホニョン）というナンバー2の指導者と一緒に、モスクワを訪問します。そして、スターリンと話し合い、スターリンの最終的支持を得ます。スターリンはその時に、「支持する」、「やってよい」というわけです。金日成もスターリンもアメリカは介入しないだろうと読んでいました。ただし、スターリンは、やってもよいが、まずその前に毛沢東と会って毛沢東の許可を得てほしい、毛沢東がウンと言わなければ決定はできないと、言いました。それで金日成たちは五月一三日に北京に行き、毛沢東に会って説明します。そして毛沢東は支持を表明します。毛沢東は、アメリカが出てくれれば我々は参戦すると、このような約束を与えます。毛沢東は非常に積極的でした。

そうして準備が進みまして、六月の大体一二日ぐらいから「演習」という名目で、軍隊が前線に移動します。北朝鮮が持っている軍隊は、みな前線近くにまで接近しましたが、その時、兵隊には演習だと言ってありました。そして大体六月二三日から二四日にかけて、「解放のための戦争をする」ということを、軍の本部から各部隊の師団に行って演説し、命令書を出します。その時に初めて、南を攻めるという命令書が下達されまして、そして六月二五日未明から総攻撃を開始するということになります。カミングス

がいうようにある部分で戦闘が起って、これが拡大したというようなことは、正しくありません。これは中央からの明白な命令に従って行われたものです。

作戦の計画については、多くの面でソ連の顧問に責任があったと思われます。私の考えでは、ソ連の顧問は独ソ戦に参加しましたので、ベルリン陥落の経験を考えていたのではないかと思います。つまりベルリンを陥落させればヒトラー帝国は崩壊したわけです。ヒトラーはベルリンが陥落したために地下室で自殺して、それで終わりました。ですからソウルが陥落すれば、基本的にはもう戦争の八割は終わりだという考え方でしょう。電撃的にソウルを攻めてソウルを陥落させれば、勝利するであろうと考えたようですが、実際はそのようになりませんでした。

戦争が始まりますと、アメリカはいち早く安保理事会の決定を採りまして、ソ連や北朝鮮の予想に反して参戦しました。このプロセスでアメリカが北朝鮮による侵攻を予想し、その用意をしていて参戦したとは考えられません。そのようにはよみとれません。カミングスは真珠湾攻撃の例も持ち出しています。朝鮮戦争開戦時のアメリカの国務長官アチソンは、真珠湾の時の国務長官のスティムソンの弟子であることから、相手に攻めさせておいて攻撃するという戦術を、もう一回使ったのではないかというわけです。しかしこのような事はカミングス自身が言っているように、証拠を残すような性格のものではないのですから、結局論証できないわけです。あくまでも頭の中での話です。実際アチソンが安保理事会の決定を採って、米軍が参戦するということを決定したときに、ひょっとしたら真珠湾のことを思い出したかもしれません。しかし真珠湾攻撃対抗の作戦を前からたてていて、北朝鮮が兵力をビルド・アップするのをずっと見ていて、そうかやって来たか、それでは我々もやりましょうというふうにしたとは思えません。そのような考えがアチソンたちの頭の中をよぎったかもしれないが、私はそれを政策として、戦略として考えていたとすることはできないと思います。やはり攻撃された段階で、その攻撃の度合にショックを受けて、アジア全体において共産主義をブロックするという方向に戦略を拡大したと、考えるべきだと思います。

そして直ちに台湾海峡に第七艦隊が派遣されて、台湾をブロックする事になります。アメリカは台湾に対して援助することを決めていませんでした。国務省では台湾でクー・デターを起こして蔣介石政権を倒したかったのです。そうすれば、はじめて台湾を支持する名分ができると考えていたのです。これはカミングスが大いに論証している点です。ある意味では台湾の政権の運命は非常に危うかったのです

けれども、朝鮮戦争の結果として、国府台湾はアメリカ軍の全面的支持を得ることになりました。

日本はどうかというと、自動的にこの戦争の基地になりました。米韓軍は釜山まで追い込まれますから、アメリカ軍には飛行場がありません。ですからアメリカ軍の飛行機は全て、日本の九州の飛行場から飛び立って、そこから北朝鮮軍を爆撃しています。直接的に九州の飛行場を飛び立って、釜山地域の米韓軍を包囲した北朝鮮軍を爆撃するというかたちで、日本は全面的に朝鮮戦争に巻き込まれます。池袋から東上線で行った朝霞は、当時第一騎兵師団の基地でした。ですからここには次々と交代要員が送り込まれて来て、当時の朝霞は一時期の横須賀と全く同じような状況でした。日本全体が基地になり、戦闘基地、休養基地になるという状況になりました。日本政府はもちろんこの戦争に対して中立ではありえず、我々はこの戦争に対してアメリカを支持すると表明しまして、マッカーサーの要望によりアメリカ軍の基地を守るために警察予備隊を設置致します。しかし吉田首相は、それ以上には戦争に対する協力というものを進めなかったのです。そして日本はもっぱら、朝鮮戦争から経済的利益を得ました。国民にとっては遠い戦争と見えました。当時静岡の中学生だった私の目に映った朝鮮戦争下の情景は、駿府城のお濠の中に入って金属のくずを拾っている人の姿です。金へん景気、糸へん景気です。大変なブームになりまして、トヨタ自動車は殆どつぶれかけていた工場が、米軍のトラックの発注、それから警察予備隊のトラックの発注で息を吹き返してゆきます。朝鮮戦争がなければ今日のトヨタはなかったといえるのではないかと思います。日本全体がそのような状態でした。日本は戦争の非常に間近なところに居て、殆ど戦争に関わっていながら、戦争は何か自分たちとは関係がないものと考え、そこから非常に大きな利益を得たという、不思議な関係があります。この点をよく解かなくてはなりません。

日本共産党の指導部は北京に亡命して、北京から日本革命を呼びかけました。自由日本放送をやりまして、要するに基本的にはアメリカ軍に対して武器をとって戦えという事です。それで在日朝鮮人には相当に過激な行動をとるように指導しました。当時の在日朝鮮人の中の左翼的な人は、全て日本共産党員です。

社会党と雑誌の『世界』はどうかというと、これは非武装中立論を出しました。安保に反対し、サンフランシスコ条約に反対し、憲法改正に反対し、自衛隊の設立に反対する、つまり再軍備に反対するということです。『世界』五〇年一二月号にのった「三たび平和について」では、米ソは冷戦だが、いつかは和解するであろう。米ソが冷戦する

根拠がなく、いつか平和共存になるであろう。だから我々がどちらかについて協力する必要はなく、我々は非武装中立でゆくのだと、この様な文章です。朝鮮戦争のことは「朝鮮事件」という言葉でしか出てきません。これは、丸山真男氏らによって起草されたものです。目の前で朝鮮戦争が起っていて、その中に日本は巻き込まれている状況の中で、朝鮮戦争のことはとりあえず考えないで、自分たちの道を見いだそうとしたのです。もし朝鮮戦争にコミットすると、賛成するにせよ反対するにせよ、身動きがとれないことになってしまうというのでしょう。それが知識人の智恵だったのではないかと思いますが、後年から顧みて、はたしてそのようなあり方はどうだったのだろうかと、疑問に思われてなりません。この論文は今、岩波から出た『世界』の論文を集めた厚い本のなかに載っていますから、簡単にご覧になっていただけます（『世界 主要論文選 一九四六－一九九五 ――戦後五〇年の現実と日本の選択――』所収）。

戦争はアメリカの仁川（インチョン）上陸により、北朝鮮軍は総崩れになりました。要するに金日成には、戦争をする能力が乏しかったのです。金日成に付いているソ連の顧問も、率直に言って無能でした。スターリンから相当怒鳴りつけられています。そのような手紙も発表されています。あんな細長い朝鮮半島の先の方に全兵力を集結して戦っていると、アメリカには空軍力もあれば海軍力もあるのですから、横っ腹に上陸されると、アウトになる。補給路、退路を断ちきられて袋の鼠になってしまうということがよくわかるわけです。だから北京では危ない危ないと見ていましたが、結局その通りになりました。ソウルの近くの仁川にマッカーサーが上陸しまして、もう北朝鮮軍は袋の鼠です。それで算を乱して逃げて、ほとんど解体状態になりました。そのまま米韓軍は今度は自分たちの番だというわけで、北朝鮮に攻め上がり、今度は自分たちが武力統一を実現しようということになりました。

韓国側が武力統一を考えるとすれば、兵力的にいってアメリカ軍に助けてもらう以外にありませんでしたから、まさに李承晩（イ・スンマン）大統領にとって望ましい結果になったと言えます。李承晩大統領は開戦した六月二五日に、大統領官邸でアメリカ大使ムチオに会ったときには、非常に落ち着いていて、今度のことは非常に不幸なことだけれども、朝鮮問題解決の絶対の好機であると言っています。ある意味では、願ってもないようなチャンスが訪れたと彼は考えていたかもしれません。

そして攻めのぼって平壌も占領して――平壌はまったく瓦礫の山のようになりました――、そして鴨緑江（アムノッ

カン）の近くまで進出したのです。もうほとんど北朝鮮全土を占領して、米韓・国連軍の旗のもとに朝鮮統一は実現したという状況になりました。ところがそのときに、中国が参戦するという事になりました。北朝鮮側が一〇月はじめから必死になって参戦を要請していました。それまで毛沢東は、最初のうちは行くと言っていたのですが、途中で一時やはり行けないという手紙をスターリンに書いています。今回その手紙が出ました。最初は行くといっておきながら、今度は行かないといってかなり抵抗したのです。ソ連側と駆け引きを繰り広げ、結局やむを得ないということになって参戦します。毛沢東とすれば、中国の内部を固めるためだったかもしれません。そしてとにかく参戦して、見る見るうちにアメリカ軍を、三八度線の南に追いやるというということになりました。

戦争はこの段階で、五〇年の一二月には、完全に米中戦争になりました。日清戦争は、戦った場所から言えば、あれは事実上は朝鮮戦争でした。こんどの朝鮮戦争は最初は南北朝鮮の戦争でしたが、ここで完全にアメリカと中国の本格的戦争になりました。米中戦争です。日本を打ち負かした二大パワーが戦争をするという、恐るべき事態になったわけです。

そしてアメリカ軍の方は、国連軍の旗のもとにアメリカ軍の司令官が総指揮官となっています。李承晩大統領が指揮権を全部委譲して、韓国軍はアメリカ軍の指揮下に入って戦っていたわけです。一方で北側は、一二月の段階で中朝聯合司令部ができました。中朝聯合司令部は、彭徳懐が総司令官ですが、副司令官には中国人と朝鮮人が一人ずつ入っています。それから中国の軍隊は共産党の軍隊ですから政治委員というものが重要ですが、政治委員は正が彭徳懐、副が朝鮮人の朴一禹（パク・イルウ）という人です。彼は北朝鮮の重要なリーダーです。この聯合司令部が五〇年の一二月以後は、朝鮮戦争における全作戦を指揮します。中国軍も北朝鮮軍も、この聯合司令部の作戦に従っているわけです。そして彭徳懐が誰の指示を仰いでいるかというと、北京の毛沢東に従っています。毛沢東は時々、このような作戦をやりますといって、スターリンに報告していますし相談もしていますが、実際は毛沢東が判断してやっているわけですから、結局は毛沢東が最高司令官です。彭徳懐がその下で指揮しています。金日成は朝鮮人民軍の最高司令官という名目は最後まで維持しますが、これはまったく名目だけでして、北朝鮮側がやっていることは補給と教育だけです。中国東北部で新兵を教育する役目は、北朝鮮側が担当しました。

南側はアメリカ人がワシントンの指示を受けて指揮し、

北側は毛沢東の指示を受けて中国人が指揮するという戦争になりました。朝鮮を統一しようという民族的な希望から起った戦争ですけれども、五ヶ月もしないうちに米中戦争になってしまったのです。米中戦争は、即ち東北アジア戦争です。ソ連はどのようにしていたかというと、ソ連はソ連軍の飛行士を参戦させました。これについてはソ連の『歴史の諸問題』という雑誌に資料が出ていますけど、今は丹東という所ですが、新義州の向かい側に駐留して、ソ連軍の飛行機が中国軍のマークを付けました。飛行士に中国軍のユニフォームを着せて、大体国境から七五キロ位の所までしか行かないようにしています。それ以上行って墜落して米軍側に落ちたりしたら、ロシア人が参戦しているということがわかってしまうので、絶対そのようなことをしてはならなかったわけです。しかしまぎれもなくソ連の空軍が参戦しました。そして五〇年から五二年に戦争が終わるまでの間に、ソ連空軍は全部で五万回ぐらい出撃します。最終的な報告書によると、ソ連空軍はアメリカ軍の飛行機を一〇九七機撃墜しています。そしてソ連空軍のパイロットは、一一九人が戦死しています。ソ連機は三一九機撃墜されています。三倍の敵をやっつけていることになるわけですから、腕は良かったわけです。とにかくまぎれもなくソ連軍の兵士は朝鮮戦争に参戦し、一一九人は戦死しているわけですから、ソ連も準参戦国といえます。

最後に停戦交渉について申し上げて終わりたいと思います。停戦交渉は非常に長くかかりました。五〇年の暮れから話が出まして、五一年の七月から始まりましたので、結局二年間というものは、停戦交渉をしながら戦争をするという状況となりました。そしてその点に関する資料が出てきまして、新しくソウル新聞がこの資料を発表しました。先の朴明林（パク・ミョンニム）氏が解説者として登場していますが、どうも私は誤解があるのではないかと思います。スターリンは戦争を徹底的にやらせたがっており、毛沢東と金日成は戦争をやめたがって、早く停戦交渉をまとめたいと思っていたが、スターリンがそれを許さなかったのだ、だからスターリンが死んでからようやく停戦交渉がまとまったのだと、そのような考え方で解説しています。これは大体アメリカ人も同じ考え方でして、レジュメの中にローズマリ・フットという人が書いた本を紹介しておきましたが（Rosemary Foot, *A Substitute for Victory: The Politics of Peacemaking at the Korean Armistice Talks*, 1990）、そこでも同じような考えが述べられています。スターリンは停戦に賛成していなかったという考えです。しかし私は、私の本の中でそれは違うのではないかということを述べました。中国はやはり筋を重んじたと思い

ます。なにしろアメリカ側が捕虜を返さないというのですから。捕虜は全員返せというのが中国の主張です。アメリカは、捕虜で帰りたい者は帰す、残りたい者は残すという方針でした。しかし中国側からすると、それは捕虜交換のジュネーブ協定に矛盾しているというわけです。中国は筋が通らない妥結はしないという態度で頑張っていました。中国側の資料から見ると明らかにそうです。

一方、金日成は早く戦争をやめたかったのです。というのは戦争は中国人が指揮していて、金日成は名ばかりの総司令官ですから。こんな状態を続けているのは、不愉快です。そして統一という目的はもはや達成され得ず、アメリカ軍の爆撃によって人が死に、建物が壊されるばかりですから、早く戦争はやめたいと思っていたのです。ところが中国側は、筋を通せと主張するのです。

次にスターリンの考えがどうだったかということですが、スターリンは密かにもう戦争はやめた方がいいと五二年頃には思っていたのではないかと、私は考えています。これは一種のスペキュレーションです。五二年の末から事が起りまして、五三年一月に北朝鮮の共産党の中で、金日成と一緒に朝鮮戦争を進めていた朴憲永（パク・ホニョン）のグループ（南から来た「南労党系グループ」）が一網打尽になります。のちに五三年八月、この人々はスパイという理由で裁判にかけられて、結局殺されてしまうわけです。逮捕されたのは五三年の一月です。朴憲永は最後に二月に逮捕されます。

同じ時期に北京に亡命している日本共産党指導部の中で、伊藤律が野坂参三によって身柄を拘束され、査問されるのです。伊藤律の逮捕は中国共産党も承認しているし、ソ連共産党も承認しています。つまり両者の合意のもとに逮捕されているのです。なぜかというと、結局日本でもスターリンが進めた極左路線が失敗に終わったことがあげられます。日本共産党に、左翼暴力革命をやらせようとしても無理だったのです。同じように朝鮮戦争も、結局は目的を果たせません。つまり国土を守ったといっても、本来は統一のために起こした戦争です。統一ができなかったということは、これは失敗です。スターリンは、日本と朝鮮で自分がイニシアチブを取って行った路線が失敗に終わったことの責任者を求めていたと思います。そしてその責任者としてあがってきたのが、伊藤律と朴憲永のグループであったと考えられます。北朝鮮という国で、党の半分を逮捕するというようなことが、当時の状況下でソ連の許可なしにできるわけがありません。ソ連と東欧衛星諸国の関係を見てもそういえます。戦争を行いながら、その戦争当事国の共産党のナンバー・ツーを逮捕して、南におけるゲリラ活動

の責任者をも逮捕してしまうようなことは、もう戦争をやめる気でなければできないと思います。金日成がやめる気であったことは確かですが、スターリンもやめてよいと、これ以上頑張らなくてもよいという考えだったからこそ、これらの逮捕にゴー・サインを出したか、或いはスターリン自身が命令したかだと思っています。

というようなわけで、新しく出た資料の読み方としては、私はソウル新聞と朴明林氏の読み方に反対です。最終的にスターリンが死んだ後に、中国共産党がアメリカ側の変化を捉えて、捕虜は自由意志にしてもよいという新しい提案を出して妥協して、停戦の合意を結びました。この停戦の結果、北京にいた日本共産党の指導部はソ連と相談して極左冒険主義方針を変えて、日本に戻ってきます。それが六全協決議です。一九五五年のことでした。戦争の結果もさまざまな影響をもたらしました。

少々時間がオーバーしてしまいましたが、以上で終わります。

五　質疑応答

［質問］

北朝鮮での朝鮮戦争の研究はどのようなものがあるのか。将来日朝国交正常化などが実現した暁には、北朝鮮からはどのような資料が出る可能性があるのでしょうか。

［和田］

おっしゃることは重要な事です。先ほども申しましたように、今は周囲の資料が公開されているわけですが、一番公開されていないのが北朝鮮の資料だということはおわかりいただけると思います。同時にそれは、韓国の資料にも同じことがいえるわけです。つまり韓国が戦争に至るプロセスの中で何を考えていたかについては、韓国政府内の資料はまったく発表されていないのです。ですから、韓国が所謂「北伐統一」を行おうとしていたというのは有名な話ですが、本当はどのように準備していたのか、あるいは準備はしなかったのか、言葉だけのアドバルーンだったのか、それに対して韓国軍はどのような態度をとっていたのか、そのようなことは一切公表されていないわけです。

では北朝鮮の方はどうかというと、今お話ししましたように、アメリカ軍が捕獲した資料はありますが、北朝鮮から発表されたものとしては、北朝鮮軍がソウルに入ったときに捕獲した韓国側の資料だけです。李承晩は北を攻めるつもりだったという資料で、これは正しい資料です。その後北朝鮮では祖国解放戦争――北ではこの戦争を祖国解放戦争と称している――に関する本はいくつか出るのですが、基本的には「アメリカと南朝鮮軍が我々を攻めた戦争」で

あり、「このような残虐なことをした」ということにつきます。一番困るのは、朝鮮戦争をしたときの軍の指導部の人たちが――今日お話しした朴一禹もその一人ですが――粛清されていますし、司令官も半分は粛清されていることです。ですから歴史叙述が非常にむつかしくなっているのです。

先ほど私が北朝鮮の手先だという非難を浴びた話をしましたので、ついでにそのこともからめて申しておきます。私はこの朝鮮戦争の本の前に、『金日成と満州抗日戦争』（一九九二年、平凡社）を書きました。北朝鮮の歴史を考える場合は、満州で金日成が繰り広げていたゲリラ戦争のことを知る必要があります。それが北朝鮮にとっては、一種の国家的な神話になっていますから。これを理解しなければ、北朝鮮を理解することはできないと思われたために、これを研究しました。この研究を始めるきっかけとなったのは、中国の資料が出たためです。

実は中国では、中国の文書館を調べ尽くして、東北の抗日戦争に関する資料というものを全て集めて、七〇巻の本として出版しているのです。それは驚くような資料ですが、内部資料ですから外には公開してません。表にはいろいろな研究を出してますし、資料も出してますし、日記も発表してますけれども、内部にはそのような資料があります。

私は残念ながらその資料を知らずに本を書いてしまいまして、困っているわけです。それでも自分が書いたことと、それほど違ってないのでよかったのですが、もちろん修正すべき点もあります。この中で一番肝心な資料は、金日成がどのような人間かという中共の一九三五年の資料があるのです。それは中国の学者が、自分が文書館で書き写してきたノートを使ってくれてよいといって私に提供してくれましたので、私はそれを使いました。資料集にのっている原文をみますと多少の食い違いがありますが、ほとんど一致していますので、一番肝心な資料はなんとかクリアしていたという状態です。

そのようにして中国が新しい研究や資料を出してきましたので、北朝鮮の側も非常に困ったわけです。そのために北朝鮮では、私が八五年に『思想』に論文《金日成と満洲抗日武装闘争》を書いたあと、北朝鮮に来ないかと私に声をかけてきました。私がこの論文で述べたことは、北朝鮮が主張していることは神話ではあるけれども、抗日戦争を実際に戦った人としては金日成は実在した人物であり、北朝鮮が言うほどではないけれども、日本と真剣に戦った人であって、日本と北朝鮮の関係を考えるときには、その事実を我々はきちんと押えなければならないということです。恐らくそれぐらいのことを言う人すら、少ないということ

でしょう。ですから北朝鮮は私を呼んで、この男も相当頭が堅そうだけど、何か少しは自分たちの影響を与えたいと、中国の資料ばかりを使わないで少しは北朝鮮の資料も使いなさいというわけで、私を呼んで話をしたということだと思います。三日のうち二日間、どこにも行かないで北朝鮮の学者と討論ばかりしていました。

その時に私は、北朝鮮の人たちは自分たちの歴史の説明を何か変えようとしている、という印象を受けました。今までのままでは説得力がないので、何か変えようとしているのだなと思い、その点では好意をもちました。北朝鮮の党史研究所の所長は私に向かって、「あなたの研究は資料に基づいているからよい」というのです。北朝鮮の党史研究所の所長からそのようなことを言われるとは思ってもいなかったので、私は面食らいました。それならば資料に基づけばよいわけですから、あなた方が主張していることについてはどのような資料があるのか、と議論ができるわけです。

私の見るところ、北朝鮮の従来の主張の資料はどうやら、金日成自身がそのように言っているということのようです。これは非常に厄介なことです。当事者の回想をどのように史料批判するかという問題です。とにかく資料に基づいて歴史家として話をしようというわけです。わたしはその意味でいろいろと自分の意見も言ったし、質問もしました。質問をすると北朝鮮の学者は淀むことはありません。隠さずにいろいろなことを答えるという状態でした。彼らもいろいろと資料を集め、ほとんど私と同じ資料を見てますから、「あなたが引用したロシア語の資料のその先には、このようなことが書いてあるではないか」というようなことを言ってくるわけです。ですから北朝鮮にも歴史家がいて、話ができるということは希望だと思って帰ってきました。

その後に『世紀とともに』という、金日成の自伝の刊行がはじまりました。北朝鮮の歴史家はその本の中で、従来の北朝鮮の神話的説明を変えはじめました。金日成が中国共産党員だったことも認めたのです。もうひとつ面白いことは、私の本から引用しているのではないかと思われる点があります。先ほどの金日成についての一番重要な中国側の資料から私が引用した部分ですが、それが金日成の自伝にも引用されています。原資料を見ないで私の訳を使っていると思われます。ですから、何とかいろいろな研究を取り入れて、学者間の討論もして、少しは自分たちの研究を国際的に通用するように変えていかなければまずいという意識があるのです。

しかし満州抗日戦争についてはそうなのですが、朝鮮戦争についてもそうであるとはとても思えないのです。

現在はソ連の資料が公開され始め、韓国側がそれを発表して、朝鮮戦争を起こした犯罪人は金日成であると主張しているからです。北朝鮮は米韓側が侵略したとくりかえして応戦しています。私の意見を申しますと、北朝鮮は金日成が先に攻めたと認めればいいではないかと思います。南だって、チャンスさえあれば攻めようと思っていたのですから。互いにそのように考えながら、北がやったことはアメリカが介入したので成功しなかったし、南がアメリカと一緒に反撃して一気に「北伐統一」を実現しようとしたことは、中国が介入したためにうまくいかなかったのです。どちらもやはり、民族的な観点から国を統一したいと考えたのでして、大変な犠牲をはらってそうしたけれども、国際情勢のなかでうまくいきませんでした。ですから、そのように認めて、お互いに許しあえばいいではないか、というのが私の結論です。それを北朝鮮の人にも言いたいとは思いますが、今すぐにこのような意見を受け入れてもらえるという見込みもありません。私はこの件では北朝鮮には行っていませんし、来いとも言われていませんが、最終的には北朝鮮はこの問題についてもきちんと国際的にも討論をして、何よりも韓国人と話をして、お互いに許しあわなければならないと思っています。双方ともに反省しなければならないし、許しあわなければならないと私は思います。

史苑（第五六巻二号）

ですから私は、自分の本がそのようなことにいくらかでも役だってくれれば、という気持ちもあって書きました。すぐにそれがいかされるとは思いませんが。以上です。

一　［資料］

米国政府資料

。Foreign Relations of the United States, 1950, Vol. VII,1983; 1951, Vol. VII, 1983; 1952-54, Vol.XV, 1984

捕獲北朝鮮文書

。U.S. National Records Center, US FEC, RG 242, *Captured Enemy Documents*,（捕獲北朝鮮文書）

中国資料・回想

。『建国以来毛沢東文稿』第一、二冊、一九八七―八八

。回想彭徳懐（一九八一）、聶栄臻（一九八四）、楊得志（一九八七）、杜平（一九八九）、洪学智（一九九〇）、師哲（一九九一）

元北朝鮮関係者証言・回想

。朱 栄福『朝鮮人民軍の南侵と敗退――元人民軍工兵将

校の手記』コリア評論社、一九七九

。崔 泰煥「六・二五戦争勃発の実像を明らかにする」、『歴史批評』（ソウル）二号、一九八八

。インタヴュー 李 相朝（ミンスク）、鄭尚進（アルマアタ）、姜尚昊（レニングラード）、朱紅星（延吉）、一九九〇－九一

。兪 成哲「私の証言」、『韓国日報』一九九〇年一一月一－三〇日。「血の海の秘話」、『高麗日報』（アルマアタ）、一九九一年五月二四日－六月五日

。呂 政（姜秀鳳）「秘話・金日成と北韓」、『東亜日報』一九九〇年四月二二日－七月一九日

ソ連政府資料

。ヴォルコゴーノフの発表、『朝日新聞』一九九三年六月二六日

。金 徹凡の発表、『朝鮮日報』一九九三年七月二八日

。ソ連外務省調書、『クーラントイ』（モスクワ）、一九九三年八月六日

。Kathryn Weathersby, New Findings on the Korean War, Cold War International History Project Bulletin, Issue 3, Fall 1993

。『ロージナ』（モスクワ）一九九三年四月号の発表、二点

。エリツィン文書（一九九四年六月二日引き渡し、七月二〇日韓国外務省目録、要旨発表）、二一六点

。「ソ連の朝鮮戦争参加」、『歴史の諸問題』（モスクワ）一九九四年一一月、一二月号

。『ソウル新聞』の発表、一九九五年五月一五日－八月一一日、九五〇余点

。『産経新聞』の発表、一九九五年八月二七日（『正論』一九九五年一一月－一二月号）、一六点

ソ連共産党資料

。中央委員会国際部日本共産党関係

GHQ文書

。日本共産党と在日本朝鮮人連盟関係

二 ［研究］

。I.F.Stone,,The Hidden History of the Korean War, New York,Monthly Review Press,1952（邦訳：内山敏訳『秘史朝鮮戦争』上下、新評論社、一九五二年）

。Allen S. Whiting, China Crosses Yalu; The Decision to Enter the Korean War, MacMillan, N.Y., 1960

。信夫清三郎「現代史の画期としての朝鮮戦争」『世界』一九六五年八月号
。Bruce Cumings, The Origins of the Korean War: Liberation and the Emergence of Separate Regimes, 1945-1947, Vol.I, Princeton University Press, 1981（鄭敬謨ほか訳『朝鮮戦争の起源――解放と南北分断体制の出現　一九四五―一九四七』第一、二巻、シアレヒム社、一九八九―九一）
。小此木政夫『朝鮮戦争』中央公論社、一九八六年
。方善柱「鹵獲北韓筆写文書解題(一)」『アジア文化』創刊号、一九八六年
。和田春樹「朝鮮戦争を考える-新しい資料による検討」上、『思想』一九九〇年九月号
。Bruce Cumings, The Origins of the Korean War: the Roaring of the Cataract, 1947-1950, Vol.II, Princeton University Press, 1990
。Rosemary Foot, A Substitute for Victory: The Politics of Peacemaking at the Korean Armistice Talks, Cornell University Press, 1990
。朱建栄『毛沢東の朝鮮戦争』岩波書店、一九九〇年
。和田春樹「朝鮮戦争を考える-新しい資料による検討」中、下の一、二、『思想』一九九三年五―七月号
。Sergei N. Goncharov, John W. Xewis, Xue Litai, Uncertain Partners: Stalin, Mao and the Korean War, Stanford University Press, 1993
。萩原遼『朝鮮戦争――金日成とマッカーサーの陰謀』文芸春秋、一九九四年
。Chen Jian, China's Road to the Korean War : The Making of the Sino－American Confrontation, Columbia University Press, 一九九四
。和田春樹『朝鮮戦争』岩波書店、一九九五年
。朴明林『韓国戦争の勃発と起源』（高麗大学提出博士論文）一九九五年八月

［その他］

。和田春樹『金日成の満州抗日戦争』平凡社、一九九二
。不破哲三『日本共産党に対する干渉と内通の記録』上下、新日本出版社、一九九三

（東京大学教授）

本稿は一九九五年度立教大学史学会に於ける講演（一九九五年十一月二十五日）をもとに加筆したものである。